

景観フォーラム

巻頭言

広辞苑によると、「散歩」とは「気晴らしや健康のために、ぶらぶら歩くこと。散策。」とある。日本の歴史では散歩を始めたのは福沢諭吉となっているが、それ以前から当然散歩は実施されていたに違いない。この福沢が始めたという視座は、散歩という行為が“西洋人の行為”と見なしているという意味合いが含まれているようだ。確かに時代劇などを見ると、目的もなしに唯ぶらぶらと歩いている庶民の姿はあまり目にするのではないようだ。武士の端くれである浪人がぶらぶら歩いている姿はどこかで見かけたような気がするが、あまり取り立てて散歩をしているという姿にはなっていない。

しかし、西洋世界での散歩という行為も恐らく近代になってからのことのように思われる。それは行為という所作に目的を求めることが近代になってからの思想の在り方であったからであろう。あらゆる行為には目的がなければならない、目的があってこそ行為というものであるという考え方がその基底にある。目的がなければ行為というものには意味がない。社会生活は“進歩・発展”を目指すものであって、唯々時間だけが無駄に流れていくのは社会というものではないという考え方がその根本にあるようだ。散歩も気晴らしや健康のためという目的があるにはある。ある行為の後の気分の切り替えや、ある緊張した行為の後の張りつめた気持ちを宥めるなどとして、身体を動かすという目的がある。散歩という行為も目的から逃れられない運命にあるのは仕方がないのが現代社会人であろう。

さて、2020年度は全て新型コロナ禍の下にあり、2021年度になってもその災いから世界は克服できてはいない。第一次世界大戦の終焉の原因にもなったスペイン風邪がどのように終結したかは気になるところだが、人類がこの災いを克服できないと考えることはあり得ることだろうか。私たちは克服できると考えることによって日々生活を送っているわけだが、あらゆる生命という観点から考えると人類が他のある生命体に絶滅させられるということもありうることはないか。考えたくはないことではあるが、生命という個体の歴史は絶滅という諸々の歴史を経験しているからこそ人類も存在しているのだと考えてもいいのかもしれない。人類は自身のことのみを考えすぎて来たのではないと思われる。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2021 年度年間スケジュール>

*2021 年度とは 2021 年 4 月 1 日⇒2022 年 3 月 31 日のことです。

2021 年

- 4 月 20 日 (火) 於ネット会議 **第 1 回景観研究会** (コロナ禍の景観 1)
- 5 月 22 日 (土) **第 1 回景観まちあるき** (東京都内：企画)
- 6 月 26 日 (土) 第 1 回理事会・総会 於 JICA 研究所
- 7 月 24 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** (企画)
- 8 月 夏休み (景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
- 9 月 28 日 (火) **第 2 回景観研究会** (コロナ禍の景観) 於 JICA 研究所
- 10 月 23 日 (土) **第 3 回景観まちあるき** (東京都神保町)
- 11 月 25 日 (木) 第 2 回理事会・**第 3 回景観研究会** 於 JICA 研究所
- 12 月 16 日 (木) 忘年会 (某所の居酒屋)

2022 年

- 1 月 21 日 (金) **第 4 回景観まちあるき** (企画)
 - 2 月 17 日 (木) **第 4 回景観研究会**：於 JICA 研究所
 - 3 月 26 日 (土) **第 5 回景観まちあるき** (企画)
- 以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

<日本景観フォーラム年度年間コロナ禍の実績>

*2020年度とは2020年4月1日⇒2021年3月31日のことです。

2020年

- 4月24日(火) 第1回理事会・総会 於 JICA 研究所⇒中止
5月21日(火) **第1回景観研究会** (東京の景観) 於 JICA 研究所⇒中止
6月28日(土) **第1回景観まちあるき** (東京都内:?) ⇒中止
7月21日(火) 第1回理事会・総会 **第2回景観研究会** (東京の景観まちづくり) 於 JICA 研究所
8月 夏休み(景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
9月25日(金) **第3回景観研究会** (東京の景観) 於 JICA 研究所⇒中止
10月18日(日) **第2回景観まちあるき** (東京都駒場)
11月15日(金) 第2回理事会・**第4回景観研究会** 於 JICA 研究所⇒中止
12月17日(木) 忘年会(？の居酒屋) ⇒中止
12月26日(土) リモート忘年会(参加者5名:18:30~20:00)

2021年

- 1月11日(月) リモート新年会(17:30~19:00)
1月21日(木) **第3回景観まちあるき** (横浜市元町周辺) ⇒延期
2月18日(木) **第5回景観研究会**: 於 JICA 研究所⇒中止
2月23日(日) リモート会議(17:30~19:00)
3月23日(日) リモート会議(17:30~19:00)
3月30日(日) **第4回景観まちあるき** (横浜市元町周辺)



埼玉県横瀬町 武甲キャンプ場のこいのぼり

高齢者

豊村泰彦

ヒマな人生のスタート

吾輩は高齢者である。高齢者という実感は全くないが、世間では65歳が高齢者のボーダーラインのようだ。65歳になると新型コロナウイルスのワクチンが早く打てる。そうすると、なんとなく「高齢者」でよかったみたいな、少し複雑な気持ちになる。とはいってもやはり「高齢者」という言葉は自分にはなじまないと思っている。

人は60歳から65歳くらいで定年を迎えると、これまでの生き方を見直さなければならなくなる。仕事に打ち込んでいた忙しい人生が終わり、ヒマな人生のスタートである。ヒマにあこがれていた時代もあったかもしれないが、これからはヒマがいいとは限らない。ペットとして買っている犬や猫のほうがよっぽど気楽だと感じる日が来るかもしれないのだ。

なので、今回は「高齢者」にはいったいどんな生き方がふさわしいのか考えてみた。



高齢者のスポーツと言われているローンボウル（シドニー郊外）
平和でヒマで平和の国にふさわしいスポーツ

生き方に二つのタイプ

統計を無視し、独断と偏見で高齢者の身の振り方を、大きく二つのタイプに分類する。

一つは老いに対して体力で抵抗しようとするタイプ。「100歳まで元気に生きる」などを目標に、毎日早朝ジョギングを励行し、筋トレをしたりジムに通って身体を鍛える。さらに市販の健康成分や若返りの秘薬、例えば芸能人も愛用しているセサミンとかスッポン成分を試してみる。できれば見た目年齢も「本当にあなた60歳過ぎているんですか？」と言われたいので、いろいろ問題はあっても我慢する。最終的には三島由紀夫のようなムキムキマンを目指す。

もう一方のタイプは、自然に身を任せる。肉体を鍛えるよりも、精神の解放と安定を第一に考える。「長生きは食生活にあり」とし、バランスの良い食事を心がける。その結果自然食品ついてやたらに詳しくなる。そして毎日、瞑想、ヨガなども習慣とし、「無為自然」な生き方を理想に掲げる。ハーハーと苦しうに息を切らして駆ける年配者を横目で見て、半ば軽蔑を含んだ微笑も浮かべる。かといって不老不死につながる神仙思想などに傾倒しているわけではない。もともとそういうことに興味を持たない。ただ楽をして長生きしたいだけである。

第3の選択肢

どちらも結局は長生きしたいのと、「自分らしい」生き方を目指す点では共通している。そして、そのどちらも理に適っていると言えよう。しかし、私だったらそのどちらの道も選ばない。そのどちらにも属さない第3の生き方があるからだ。それは端的に言うところ「考えない」生き方の選択である。つまり「アホ※」になってしまうことである。

アホになる修行

横尾忠則言葉集



横尾忠則著「アホになる修行～横尾忠則言葉集」イーストプレス

こう言うと、「それは本能的に生きることとあまり変わらないですよ」と指摘を受けるが、「その通り。究極は本能で生きることです」と回答する。画家でイラストレーターの横尾忠則氏は言う。「本能で生きれば恥もコンプレックスも関係ないだろう」。いやその通り。恥とかコンプレックスでどれだけ自分の行動を制約する結果になっただろう。またそういう意識を克服しようなどと無理をして、神経や体力をすり減らしてきたか。本能というのは、生命体にとっての根源であるので、本能による行動は間違っていないのだ。本能で生きるとは本当は生き方の王道なのだが、世間では「そうなったら人間は知的生物とはいえず、動物と何ら変わらない」として忌避されてきた。

「アホ」になる修行

人間はなんでも目や耳で情報を取り入れて脳で処理して行動を起こしているが、高齢者に達してもそのペースを続けていたら心の疲労は取れない。心の疲労が取れないと想像力は生まれない。ただし、人間が「本能」に近い生き方をしたら「アホ」になることは間違いが、ある程度の年齢に達したらその「アホ」は良い方向に変わるという期待感を持っている。そして、その決断をするのが「高齢者といわれる年代に入ったどこかの時点である。徐々にそうってきた場合は、「それでいいのだ」と認めればよいのだ。おそらくその理想の姿は、天才バカボンのお父さんだろう。



赤塚不二夫著「天才バカボン」竹書房文庫

ただ、だれでもがすんなり「アホ」になれるわけではない。「アホ」も「アホ」の能力がいるらしい。横尾は「『アホ』になることは一生の修行で誰にでもできることではない」と言っている。「アホ」になるのに修業がいるとは驚きだが、横尾先生はそのための本を出したので、興味のある人は読んでみたらよいと思う。

【注】

※「アホ」は関西圏で使われ、一般的には「バカ」に相当する

遊悠散歩・日々雑感② ー変わる街並み・町並みー

野田路人

全世界に広がり、多くの人々が感染、死者を生みだしているコロナ禍、日本でも昨年の2月3日に横浜に入港したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の乗客の感染患者対応からコロナ禍に見舞われています。その後の緊急事態宣言発令などにより働き方を含め日常生活が一変し、今までとは異なる新しい暮らしの日々が続き、これからも色々な事が変化すると考えられます。

オフィス街は・・・

コロナ禍により、モバイル活用によるリモートワーク、テレワークが日常化され、在宅勤務など仕事の進め方が大きく変わり、会社のオフィスの必要性・ニーズが見直されはじめ、企業の賃貸スペースの縮小やサテライトオフィス・シェアオフィスの拡充が加速され、ワーカーの郊外移住の増加や住宅内でのワークスペースの確保などの流れを生み出しています。

「電通」は汐留本社ビルを売却し、今後は見直しによる必要とするワークスペースでテナントとして入居、「NEC」「ソニー」「エイベックス」など有名企業の自社ビル売却の動きが相次いで報じられています。

「パソナ（人材派遣・教育事業）」は本社が入る大和呉服橋ビルが三菱地所による「東京駅前常盤橋プロジェクト」に伴い解体が決まっており、22年までに退去予定でしたが、コロナ禍の影響に加え東日本大震災以降かねてより東京一局集中に危機感を持っていたこともあり、都心のオフィス賃料の10分の1から5分の1のコストの淡路島に本社機能を移転させることを2020年9月に発表、島内に本社新社屋、社宅等を次々に建設し、2024年まで本社機能移転と1200人の移動完了を予定、同時に同社が進めている淡路島を関西圏のリゾート化による地方創生を加速させることも目指しています。

この「東京駅前常盤橋プロジェクト」は大和呉服橋以外に日本ビル・JFE商事ビル・JXビルを解体し4棟のビル建設を計画、2027年完成を目指し進行中で、2021年6月竣工の「常盤橋タワー※TOWER B」は高さ212mで、完成時点では大手町地区で暫定1位の高さになります。現在日本一の高さのビルは大阪の「あべのハルカス」300mですが、2027年にメインタワーのTORCH TOWER(トーチタワー ※TOWER A)高さ390mが完成すれば、森ビルが2023年完成予定の「虎ノ門。麻布台プロジェクト」のメインタワーの330mを抜き日本一となります。



プロジェクトは昨年9月に大幅な計画変更が発表され、ポストコロナ時代の対応施策として屋外空間が追加され、TORCH TOWERのデザインも大きく変わりました。低層部の1階～8階に全長約2キロ、約5000㎡の大規模な空中遊歩道が整備され、空中遊歩道の終着地に約2,500㎡の屋上庭園も整備されます。コロナ禍が無ければこのデザイン変更はなかったのかもしれませんが。



出典：三菱地所より

東京駅前広場から見た完成予想図を見ると、街並みの見え方はかなり変わると思われます。



これからの都市空間・街並みは・・・

日本にある高さ180メートル以上の超高層建築物は86棟、100m以上の高層建築物は東京都、大阪府に100棟以上があります。オフィススペースの必要ニーズの変化を考えると、今後の建物の規模や外観などの変化と共に都市空間・街並みがどのように変わるかの予想は難しいと感じます。

住宅街は・・・

昨年からのコロナ禍による自粛生活が続き、会の活動の「まちあるき」などもかなり制限されています。一歩も家の中から出ない日もあり、運動不足の解消を兼ね、ご近所さんで「プチまちあるき」をすると、確かあったはずの賃貸アパート無くなり、同じような外観の3階建て住宅7軒に変わっています。



元のアパート

(←グーグルマップ：ストリートビューより→)



現在(敷地角より)

別の場所では、住宅が無くなり更地に建売販売の看板がたてられていました。分割された土地にどんな家が建つか注視すると、こちらは外観デザインの違う2階建てが2棟に変わりました。



元の家(←グーグルマップ：ストリートビューより)



2020年9月



2021年2月

住み慣れた我が町・・・町並みが少しずつ変わり、自転車で見て周ると建て替えや新築の家は3階建て家が増え、ぎりぎり駐車スペースを1階に据えたペンシルタイプの家が多く見受けられます。



間口の狭い3階建て



3階に建て替え



元お風呂屋さんの跡地

住宅の変化比較用に散歩道の一角のマップを思い出すままに描いてみました。

1960年代



2021年
(現在)



マップから見た変化・・・

- ・建物数：37→120に増加、(敷地：35→115に分割　＊同じ区画形状：13)
- ・建物規模：1階（平屋）：22→1、　2階建：14　→107、　3階(3層)：1→12
- ・アパート数：1→10
- ・空地：4ヶ所(原っぱ)→1ヶ所(貸駐車場)
- ・ガレージ・駐車スペース：2→114
- ・新設道路：3ヶ所

変化の要因を考えると・・・

- ・高度成長と共に敷地の価格が上がる中、代替わりによる相続等で土地の売却や子や孫の複数名義の分割や借地期間が過ぎ地主に敷地の一部または全部が返却され分割化が進んだ。
 - ・建売業者は売り易くする為、土地を分割し建蔽率・容積率ぎりぎり一杯に住宅を建て、新規土地購入者の新築や従来の居住者も立替時に2階建て、3階建てにして土地を有効利用することが一般化となった。
- ※従来、建築基準法では木造2階建しか認められなかったが、法改正と工法の進化により3階建が可能になった。
- ・土地の有効利用の為、敷地内でアパート経営をする地主が増え、空地も無くなった。
 - ・自家用車所有が一般化し、敷地内に道路に面した駐車スペース確保が常識化した。

景観を考える上で・・・

街並み・町並みの変化する要因の一番は経済性が起因していると考えます。スクラップアンドビルドの日本で私たちは何を守り、何を残すべきか、何が出来るかは大きな課題です。

前回の「まちあるき」で歩いた「駒場～代々木界限」は一戸建てや低層マンションの閑静な高級感を感じる住宅街で、小分割の敷地や3階建売住宅は見かけませんでしたが、何故かを説明すると、そこに課題に対するヒントがあるかも知れないと思います。

横浜まちある記

丹羽譲治

3月30日、11時にJR石川町駅元町口にメンバーが集まりました。野田さんの友人が参加され、総勢6人となりました。

最初に訪れたのは、山手イタリア山庭園でした。2つの建物を見学することができました。最初のブラフ18番館は横浜市認定歴史的建造物に指定されています。ドイツ人建築家ゼールの設計により1900年頃建てられ、1993年にこの地に移築復元されました。コロナ禍で、階段が狭いということで残念ながら2階のプライベート空間に立ち入ることができませんでした。東にひらけた箇所にサンルームがあり、大島桜を眺めることができました。次の外交官の家は国指定重要文化財に指定されています。アメリカ人建築家J.M.ガーディナーにより設計され1910年に東京都渋谷南平台に建てられ、1997年に移築復元されました。「山手西洋館ウエディング」とパンフレットにあった通りの結婚式に遭遇しました。この時期内輪の慎ましい結婚式が行われたようでした。天気にも恵まれ、美しい庭園で、華やかな気分になりました。

途中カトリック山手教会に寄り、内部に入ることができました。奥にマリア像が佇み、中央が高く、3本の柱を束ねた列柱(柱の礎盤も3円が重なり合って美しかった)が空間に奥行きを与え色はグレーで訪れたものに静謐な念を抱かせる空間となっていました。山手本通りに歩みを進めるとベーリックホール(横浜市認定歴史的建造物)にたどり着きます。J.H.モーガンの設計により1930年に建てられました。横3分割、縦2分割された窓は中央が嵌め殺しになっていて、下の窓は左右が開き窓で、上の窓は突出し窓となっていました。枠は細く存在を消すように繊細に作られ、この窓が共通に使われてました。

すぐ近くの元町公園に建つエリスマン邸(横浜市認定歴史的建造物)は1926年に山手127番地に建てられ、1990年に移築復元されました。設計者のA.レーモンドは旧帝国ホテル設計者F.L.ライトと来日し、ホテル完成後も日本で設計活動に従事しました。竹橋のパレスサイドビルの地に建っていたリーダイスダイジェスト社と群馬音楽センターが代表作とされてます。所員として前川國男と吉村順三



ブラク18番館



ブラク18番館



外交官の家



カトリック山手教会



ベーリックホール



エリスマン邸

も在籍した時期もあり日本の建築界に多大な影響を与えました。戦時中はアメリカに帰りました。戦後日本に戻り、多くの木造建築を設計しました。柱梁を表しにする戦後の木造建築からすると趣が異なり、戦前の木造建築であるこの邸宅は暖炉に施された装飾も意匠がおとなしく可愛いらしささえ醸し出していました。家具がレーモンドのオリジナル(この邸宅用にデザインしたものでない)を復元したと職員の方に聞きましたが、まず、色が内装に使われている落ちついた色でなく白っぽく、デザインもこの空間にそぐわないものであったのが残念でした。元町公園のテーブルとベンチが空いていて密にならずに昼食を取りました。桜が満開で、懇談の場となりました。外人墓地を左に見ながら歩き、港の見える丘公園に辿り着きました。眼下に港を見下ろし、一気に視界が開けました。フランス橋を経て山下公園へと降りました。平日なのに多くの人で溢れてました。神奈川県庁を右に見ながらジャックの名称で親しまれている塔を擁する横浜市開港記念会館を訪問しました。国指定重要文化財であり、1917年に横浜開港50秋雨年を記念して開館しました。辰野金吾が設計したと思わせる建築は、福田重義氏によるコンペ当選案をベースに山田七五郎を中心に横浜市建築課がまとめた「会館の歴史」に記述されてます。スタンドグラスをバックに階段で写真撮影が行われ、講堂も会議室も活用されてました。今日訪れた建物で唯一内部撮影が許されてました。外国では美術館でさえ撮影が許されてるのにいつも不思議に思います。

1万歩を超えた横浜まちあるきはここを最後に解散しました。近くには、神奈川県庁や横浜税関など古い建物が残されてます。日本の建築の寿命は特に住宅において30年とされてます。100年住宅やリノベーションで古い建物を再生する動きもありますが、限られてます。まちあるき「大丸有」で特に大手町界隈のガラス建築群は足元に余裕もなく疲れしました。古い建物は目の高さで楽しませてくれます。これらの建物が継続して維持されて欲しいと思います。満開の桜と市の管理の行き届いた花壇が我々の目を楽しませてくれました。コロナ禍がおさまり、まちあるきが自由に出来るようになりたいものです。

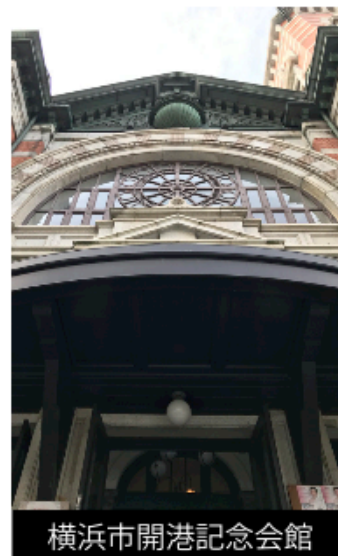
※日本建築家全集1アントニン・レーモンドに栗田勇の司会で岡本太郎との興味深い対談が掲載されてます。



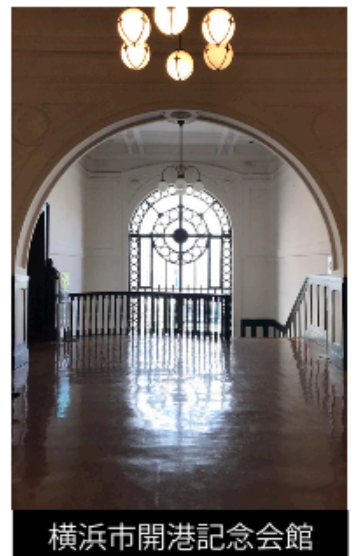
港の見える丘公園



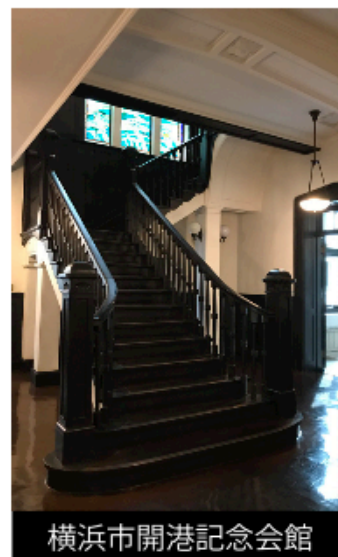
神奈川県庁



横浜市開港記念会館



横浜市開港記念会館



横浜市開港記念会館



横浜市開港記念会館

<LFJブックレビュー 70>

『フィレンツェ大図鑑』	A・パオルッチ他著	原著 2005 年刊行	2015 年刊行	西村書店
『ロンドン大図鑑』	P・デイヴィース他著	原著 2012 年刊行	2017 年刊行	西村書店
『パリ大図鑑』	P・ド・モンクロ著	原著 2000 年刊行	2012 年刊行	西室書店

齊藤全彦

この三つの都市に共通するものを取り上げるとすればいろいろあげられると思うが、どの都市も世界的に有名な芸術を標榜できる場所を持っているという点であろうか。フィレンツェはウフィツィ美術館、ロンドンは大英博物館、パリはかのルーブル美術館と。しかし、なんといってもこれらの三都市はヨーロッパが近代化を成し遂げてゆく過程でなくてはならない中心的場所を提供してきたということであろう。フィレンツェは15・16世紀の毛織物業をベースに金融業の拠点としてイタリア・ルネサンスを誕生させた中心都市であったし、ロンドンは帝国主義の拡充により16世紀・17世紀・18世紀のヨーロッパ近代化を牽引した世界都市であり、パリはそれらの富を芸術という形で表現できた都市であったし、現在もあり続けている。16世紀のパリを訪れたかの有名な『エッセー』の著者モンテーニュはゴミが溢れ臭気が立ち込めた中心街の薄汚い風景を描写している。芸術の都パリはまだ存在しておらず、汚らしい多忙な都市の一つに過ぎなかったということだ。

フィレンツェが芸術都市になったのは金融業を営みこの都市を当時の世界都市まで引き上げたメディチ家の努力に負っている。当時のメディチ家の財力はイタリア・ルネサンスが胎動する大資本の基礎であったし、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロなどの天才が躍動できる下地を作り上げたと言えよう。フィレンツェという都市があったからこそルネサンスが可能であったとも言えるのではないか。そして、たまたまそこに財力がある都市が存在したということだけではなく、芸術を理解しそれが都市というものの価値になることを実感できた人々がいたということであろう。当然そこに現れる景観は芸術的なものとなる。

ロンドンが世界都市になったその背景には大英帝国の存在なくしてはありえないが、大英帝国が三世紀にわたり収集した(略奪した)世界の宝物は大英博物館という世界にもまれな場所を提供している。ここに来れば世界の宝物が一望できるということだ。ロンドンの世界の近代化のけん引力として工業・産業化という道を経たが、その弊害も世界初として経験したことになる。工産業が齎す人間社会の疎外現象と言えるものだ。しかし、近代化の中にも景観は芸術を求めている。

そしてパリは18世紀の人間革命を経て自由・平等・友愛という人権概念を近代社会に広めるために人類はあらゆることをしなければならないと世界に宣言した。人類の富は、この人権概念を基礎に存在しなければならないのであり、人権概念なくして富というものは存在しないことを示したのである。人権概念は景観においては歴史的景観を求めているようだ。

フィレンツェ・ロンドン・パリという三都市はそれぞれのお国柄からそれぞれの特徴を表出しているが、三都市が同様に表明しているのが、人権を維持するためには芸術という手段が必須条件であると表明しているのではないかと思われる。

(齊藤全彦)



<LFJブックレビュー 71>

『白鯨』ハーマン・メルヴィル作 原著 1851 年刊行 阿部知二訳
1970 年刊行（筑摩書房）

齊藤全彦

私たちが海の景観を思い浮かべるとき、陸から眺めた場合と船が何かに乗って海の中から海そのものをとか陸を眺めたりするという具合に二通りの見方があるのではないか。ご存じのとうりこの地球上で海は陸の 2.3 倍の面積を誇っている。生命が海から始まったとすれば当然のことかと思われるが、海は命の母となればこそ人類の海への思いはひとしおと言えよう。

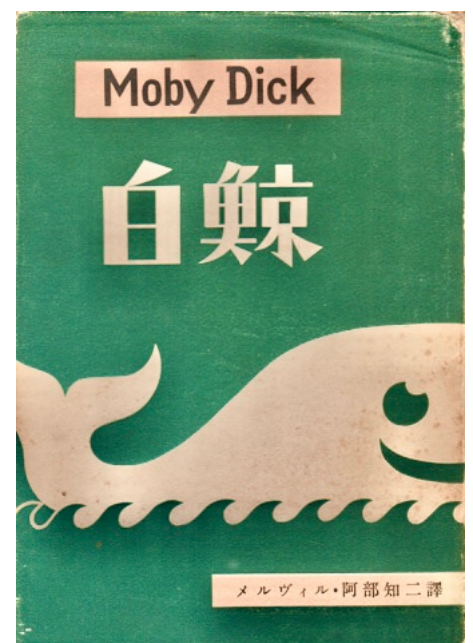
著者ハーマン・メルヴィル（Herman Melville 1819－1891）はニューヨークに生を享け、水夫は当然のこと諸々の職業を経て作家となった。所謂書斎人とは程遠い人であったが、『ビリーバッド』は現在でも多少は知られているが『白鯨』以外はほとんど忘れられた作家と言えよう。もっとも、この『白鯨』さえも、刊行当初若干の評価は得たが、あまり人口に膾炙されず、その後の作家活動も出版物では食ってはいけず、またもや、諸々の職業を転々とせざるを得なかったようだ。しかし、サマセット・モームの『世界の十大小説』の中の一冊として紹介されるほど、現代では世界文学の必読書となっている。『白鯨』は 1851 年刊行以来その文学的評価は増々高まっていると言えよう。

『白鯨』は当時流行っていた海洋小説のひとつであるが、単に捕鯨船がクジラを追いかけるというだけでなく、曰くありげな船長が率いる捕鯨船に乗り込んだ話し手が、一人生き残った者としてその体験談を話すという筋書きである。その船長たるや多くの捕鯨体験の中で、白いクジラに自らの片足を食いちぎられるという過去を持つ。即ち、この話はその白鯨を追う復讐物語である。物語は主人公がどのようにこの捕鯨船に出会ったか、そしてその船長という人物が捕鯨活動が人生そのものである以上に復讐に燃える鬼の如く描かれている。

この小説は主人公とともにこの捕鯨船に乗り込み捕鯨という活動を通して、嵐、なぎ、沈黙する風、そして、いろいろな海の風景の中で読者は海という大自然の中に放り出されることとなる。捕鯨に関する専門的な説明やその他のいろいろな脱線に読者は耐えるなければならないが、クジラを発見してからの乗組員の動きには素晴らしいものがある。そして白いクジラ即ち運命の白鯨を発見してからのその追跡と戦闘は他の小説作品にはない迫力がみなぎっているし、読者はまさに白鯨との戦いに参加させられるわけである。原題は“Moby Dick, or The White Whale”とされているが moby の意味はバカでかい・途方もなく大きいで dick は男・奴・野郎を指している。即ち、日本語にすると「バカでかい奴」とでもいえるのか。

小説は最後の段階になり白鯨を発見してまさに乗組員全員がクジラと格闘することになる。海はクジラが巻き起こす嵐のような海のうねりとそこに幹船から引き出された数隻の小舟に乗った漁師たちが

手づから鋸を持ち白鯨と戦うが、白鯨はすべての船を曳き倒し母船そのものをも沈没させて乗組員は一人を残してすべて海の藻屑と化してしまう。この『白鯨』という物語はその戦いの中でたった一人が生き残り、その彼が書いた記録ということになっている。（齊藤全彦）



〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町 14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <https://www.keikan-forum.org>

